

変容から変革へ

千葉大学統合情報センター長

井宮 淳

今年度の国立大学法人情報系センター協議会は、別々に開催していた総会・研究集会と学術情報処理研究集会を同一会場で連続して開催し、また時期を9月に変えるなど変則的な開催になりました。本誌への投稿者ならびに査読・編集に関わったみなさまには大変ご迷惑をおかけしました。

本誌、学術情報処理研究（JACN）第17号は、2012年12月開催の幹事会での決定により原著論文のみ収録しました。査読のない研究発表論文は別冊子として発行する第17回学術情報処理研究集会講演論文集に掲載しました。それに先立ちJACNの査読処理にも変更がありました。これらの方針は次年度以降も継続する予定です。

このような編集方針の変化は、これまでJACNの編集や学術情報処理研究集会に深く関わってこられた方々を中心にして発案し、具体化されました。学術論文誌にふさわしい質と量の論文を掲載し続けるためには編集を担う組織と制度の充実が必要です。自らの意志でこのような変容を遂げたことを、まずは喜ぶたいと思います。

しかし問題がすべて解決したわけではありません。国立大学の法人化以来、多くの情報系センターは厳しい運営を強いられています。慢性的に不足する予算、肥大化・複雑化するシステムの管理・運用、増大する情報セキュリティ脅威への対処、センターの存在意義や使命の再定義など、数え上げればきりがありません。このような法人化＝外圧によって生じた軋みに対抗する「内圧」が、今起こりつつある変容ではないでしょうか。

変容を遂げるための新しい試みがすでに始まっています。徳島大学・上田先生によるJACN誌の常設事務局の試案、東京農工大・萩原先生による協議会Webサイトの一元化計画など、有志の方々による提案が今後の協議会のさまざまな場で議論されることでしょう。変容から変革への道のりは始まったばかりです。その牽引役としての本誌の発展を切に願う次第です。